

樹の着果量や果実の肥大に応じて粗摘果を進めましょう！早生温州では7月上旬まで、普通温州では7月中旬までに、葉果比 10～15 を目安に行ってください。

1 令和8年6月の気象

令和8年6月の半旬別の気象を表1に示した。平均気温は全体的に平年並みであった。月平均気温は21.6℃で、平年と同程度、気温が高く推移した前年より2.4℃低かった。

降水量は、第1半旬は台風6号、第6半旬は台風7、8号の接近により、平年及び前年より多かった。月合計は452 mmで、平年の210%、前年の402%であった。

日照時間は、降雨が多かったこともあり、第3半旬を除いて平年より少なかった。月合計は88時間で、平年の66%、前年の47%であった。

表1 令和8年6月の気象（館山アメダス）

半旬	平均気温（℃）			降水量（mm）			日照時間（hr）		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	20.9	20.3	20.5	126.5	27.9	40.0	15	28	25
2	19.8	20.7	22.1	34.0	33.4	29.0	7	25	13
3	21.3	21.2	23.2	17.0	38.9	14.0	27	21	19
4	22.2	21.7	26.0	54.5	41.3	0	18	20	46
5	22.5	22.3	26.2	33.5	38.5	16.5	12	20	34
6	23.0	23.1	26.3	186.5	34.9	13.0	9	21	54
平均／計	21.6	21.6	24.0	452.0	214.9	112.5	88	135	190

注1）平均／計：平均気温（℃）は平均値、降水量（mm）及び日照時間（hr）は合計値を示す

2）表の数値は表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計は一致しない場合がある

2 果実及び樹の生育

暖地園芸研究所における本年の調査樹の着果量は、「日南1号」では平年並み、中庸程度である。「興津早生」では中庸～やや多い。普通温州では「大津4号」は中庸、「青島温州」で中庸～やや多い程度である。そのため、後述するように樹の着果量に応じて摘果する時期及び量を調整する。

暖地園芸研究所内の病害虫の発生状況は、6月上旬ごろから新梢でのミカンハモグリガの被害が多い。チュウゴクアミガサハゴロモを含めたハゴロモ科も発生している。また、一部圃場でカイガラムシ類が多い。

3 7～8月の栽培管理

（1）摘果

摘果は粗摘果と仕上げ摘果の2回に分けて行う。1回目の粗摘果は、早生温州では6月下旬～7月上旬、普通温州では樹勢が低下している場合のみ、7月上旬～中旬に葉果比 10～15 程度で行い、その後8月上旬～9月上旬（粗摘果の1ヶ月後）に葉果比 25 程度に仕上げ摘果を済ませる。着果の少ない裏年の樹では粗摘果は控え、仕上げ摘果から行う。仕上げ摘果の基準は、1果当り葉数で早生温州は25～30枚、普通温州は20～25枚である。

（２）マルチ資材の被覆

高品質果実の生産にマルチ栽培は有効である。被覆は、夏の乾燥期が終わり秋雨期に入る前の８月下旬、遅くとも９月上旬に開始する。土壌の乾きやすさや灌水設備の有無によって、開始時期や被覆面積を調節する。マルチの適地は、ゆるやかな傾斜地で日当たりや水はけが良く、風の影響が少なく、普段から高品質の果実が生産できる園地である。

（３）主な病害虫の防除

１）かいよう病

梅雨から果実肥大期、台風襲来前には果実を重点的に防除し、夏秋梢に対しては、本病の被害を助長するミカンハモグリガの防除を行う。ただし、銅水和剤はマシン油乳剤、デランフロアブルとの近接散布による葉害が起こりやすいので、散布間隔を２週間は確保する。本病に感受性の高い品種を栽培する場合には、園地の防風対策を行う。

２）黒点病

枯枝が最も重要な伝染源となるため、生育期を通じ、除去を徹底する。また、密植園の伐採、老木の更新など、枯枝ができないような栽培管理が必要である。薬剤散布はマンゼブ剤の散布を梅雨前から開始し、以降、１ヶ月ごとまたは累積降雨量が250mm前後に達した時点で散布を行う。防除は、９月上中旬まで継続して行う。

３）そうか病

本病は、降水量が少なくても降雨が長く続くと発病が多くなる。加えて、通風が悪く、降雨後に乾きにくい場所や、窒素肥料が効きすぎている園で発生しやすい。通風を良くし、多肥にならないよう施肥を適切に行う。薬剤による防除適期は発芽期から落弁期であり、多発園では防除を徹底する。

４）ミカンサビダニ

６月頃から９月まで果実を加害する。被害が拡大する恐れがあるため、果実１～２個の被害を見たら直ちに防除する。特に梅雨明け直後に行う防除が重要である。樹冠の内部・上部など薬剤のかかりにくい部分に発生が多いため、摘果時に注意深く見る。黒点病の防除に用いられるマンゼブ剤により同時防除が可能だが、多発した場合は殺ダニ剤で防除を行う。

５）ミカンハダニ

果実や葉を加害する。マシン油乳剤は７月以降の散布では果実の糖度が下がる可能性があるため、寄生葉率30%を目安に殺ダニ剤による防除を行う。また、９～１０月にも多発するので、秋期には寄生葉率20%を目安に殺ダニ剤を散布する。

６）ミカンハモグリガ

通常の結果樹では徒長枝は冬季にせん除するので、本虫の被害を受けても防除の緊急性は低い。しかし、激発した場合や、新梢を利用する隔年結果樹、高接ぎした樹や苗木、幼木などでは防除が必要である。新葉展開初期から２～３回、殺虫剤を散布する。

《 生育情報の問合せ先 》 千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室
電話 0470-22-2961

《 生育情報の発行元 》 千葉県農林水産部生産振興課園芸振興室

※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。

<https://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/seiiku-zyoho.html>